



<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.43 / Spring 2020

会 長 滝浦 真人

事務局 〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学 人文社会科学系 日本語教育講座 北野浩章 研究室内

事務局連絡先 psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名: 日本語用論学会

ゆうちょ銀行 ○九九支店 当座預金 店番号 099 口座番号 0130378 日本語用論学会

《会長就任ご挨拶》

日本語用論学会会長
滝浦 真人 (放送大学)

みなさま、こんにちは、滝浦です。このたび、会長を拝命いたしました。よろしくご指導のほど、お願い申し上げます。

就任前から会長職の何たるかを知っているということは、あまりないように思われ、もちろん私もそうでした。しかし、就任から日を置くことなく、「現実」の力が人を否応なく「会長」にしていく、との摂理を実感することとなりました。

私の会長としての初仕事は「お詫び」です。このNLのページを繰っていただくと、加藤前会長との連名による報告文が書かれています。詳細は譲りますが、様々レクチャーを受ける中で、過去の収支表にどうもわからない箇所があり、精査したところ、1箇所会計上不整合な点のあることがわかりました。たった1つの不都合でも、計算の結果を大きく変えてしまうことがあります。今回の見直しで、私たちの学会は、じつは財政的余裕がなかった、との事実が判明しました。まことに申し訳ございません。

学会は会員皆さまからお預かりした貴重な会費によって運営されています。つねにその出し入れには気を配り、お財布の状態を把握しながら舵を切っていかなければなりません。お金という現実の圧倒的なプレゼンスは、コロナ禍によって得ることとなった皮肉な教訓の1つでもあります。それに責任を負う会長は、お金と

“仲良く”していけることが必要なのだということになりました。

つい3月まで、私は「編集委員長」でした。「長」だから同じように考えるだろうと言われるかもしれませんが、それがそうでもありません。学会誌 S/P をどれだけ活発な研究発表と交流の場にして行くか? ということばかり考えていました。おかげで、最後に編集した S/P21 は初の200ページ超えとなり...、と嬉しそうに綴っていた自分がまだその辺に見えます。

ところが、「会長」になったとたん、見える風景はすっかり変わってしまうのでした。冊子が厚くなれば製作費も増すのが道理で、今回の S/P は127万円 (+郵送料18万円) の経費がかかっています。他方、学会の財政規模は、会費収入ベースで大体260万円 (過去4カ年の平均値) といった水準です。さて、それがお財布の大きさであるとき、学会誌に150万円の経費をかけられるか? という疑問が、否応なしに浮かんできます。「現金なこと」とは思いつつ、会長としては真剣に考えざるを得ません。

編集委員長だった自分が抗弁してきます。何も贅沢をしたわけじゃない、投稿論文から5本載せることができたのはまことに目出度いと言うべきで、それに招待講演、招待論文、書評論文が付くのは学会誌として当然ではないかと。然り、全面的に同意する、と言いたいところです。しかし一方、それをするだけで150万の浄財が出て行ってしまふとなれば、もう早速に管理職的物言いにならざるを得ません。どの口で?! と思いながら、新編集委員長の田中先生に、

「ちょっと経費抑えてね」などと言っている自分がいます。当たり前のことを実行しようとするだけで体力を超えてしまいかねない、というのとても厄介な事態です。

さらには、この問題を考える始めるや、単純に見積りを取って安い業者に...、といった話では収まらないことに気づかされます。この問題は、そもそも紙媒体で学会誌を出し続けることの意義をどう考えるか？との問いを呼び起こさずにはいません。現在の考え方は、会員の権利（特権）として、学会誌に投稿することができ、掲載された論文を一般に先がけて読むことができる、というものです。この最後のところは大きな意味を持ちます。「一般に先がけて」ということは、世の中一般に対しては「公開猶予」期間があるということで、学会 WEB ページでの公開は、当該号の刊行から 2 年が経過するのを待たなければなりません（版元との契約です）。

他方で、最近増えつつある「オンライン・ジャーナル」は、紙媒体では発行せず、刊行後すぐさま公開されるのが一般的でしょう。そんなことが気になって S/P 製作費の明細をあらためて見ると、大雑把に、製版代と紙代と印刷代に三分されることがわかります。オンライン化すれば 1/3 になるという単純な話ではありません（ウェブに特化したオプションが様々あります）、経費面でのメリットもあるでしょう。

ずっしりと重い 200 ページの学会誌を手にする実感のようなものも、意味があるに違いないと思います。一方、「スピード感」の方が大事だと考える人もいます（すっかり微妙な言葉になっていますが(笑)）。無い袖は振れないという面も考えなければなりません。おそらく、議論し始めると意見百出で、容易には決し難い大問題であることがわかってくると思います。学会誌問題を検討する「フォーラム」でも設置して、全会員から意見を聞きながら考えていくのがいいだろうか、など思案しているところです。

会長になって目に入るようになったもう 1 つの風景は「大会」です。加藤前会長から真っ先に言われたのが、「開催校決めるの、大変だからね」ということでした（10 校ぐらい断られたとも）。かつては、学会の開催校になるということが一種の名誉のように捉えられ、私立の大学では、会場の無償使用に加えて、補助金までくれるところも少なくありませんでした。それが今や様変わり、国立大学は軒並み施設利用料を取るようになっており（2 日間で 40 万円といったところ）、私立でもそうなりつつあります。

そんな中、共催の形を取れば利用料免除というところもあります。幸いなことに、研究科共催

で利用料免除となるある大学で、お受けくださるとの内諾をいただきました（遠からず公表できるでしょう）。そのやり取りのなかで、今まで見えなかったものが目に入ってきました。窓口になってくださった先生は、まず研究室の会議に諮り、研究室として支援するとの決定をしてくださりました。その研究室はというと、語用論がご専門ではないものの、大いに親和性のある研究をされている高名な先生方がいらっしゃいます。ひとたびそのことに気づいてしまうと、その大学ならではの特色を出さないのは勿体ない、との思いが消せなくなりました。

これまで語用論学会では、開催校との関係について、目に見える形での配慮は特にしてきていませんでした。しかし、その開催校ならではの味わいを出してもらえよう形があっているのではないかととの考えに立ち、「大会実行委員会」を開催校に置いて、シンポジウムなど企画の提案も可能になるような変更をしようと、いま準備をしています。

このことは、小さな変革ですが、「大会」というものが持つ意味を変える力を発揮するのでは？とひそかに思っています。細長い形をした日本では、これまで個人差と思われてきた語用論的習慣の違いが、かなりの程度まで方言の違いであることが解明されつつあります。そんなことにも思いを馳せながら、これまで以上に全国を回ってネットワークを広げ、新たに会員となってくれる人を増やしていけたら、と夢は広がります。

一方でまた、現実とはまことに容赦ないものです。コロナ禍の収束が見えない中、今年の大会はどうするのか？との問いが早速に大きくなっています。もちろん、予定どおり東京・八王子の創価大学で皆様と再会できることを願っています。しかし、状況が許さない可能性も否定できないかもしれません。もしもそうなったとき、無理なら中止というのは尤もですが、しかし学会が大会を中止するとは、会員の研究成果発表の機会を奪うことでもあります。世の大学が一斉に遠隔授業を始めている様を眺めつつ、授業が成立するのなら、「オンライン学会」を正規の大会として開催することはできないだろうか？との考えも頭を駆け巡り始めています。

多様かつ変化の激しい現実に対応するためには、つねに可能性を思考することの実践が必要でしょう。そうして、「会長職の何たるか」について考える間もないまま、貧乏暇なしを地で行きながら 2 年間はあっという間に過ぎるのだな、と確信するに至った今日のご様子です。

★ 学会会計の訂正と学会財政について

《特集 語用論研究の新潮流》

(執行部)

新会長 滝浦真人

前会長 加藤重広

語用論研究の新潮流 (2)

認知言語学から語用論へ

尾谷 昌則 (法政大学)

会員の皆さまに、ご報告とお詫びを申し上げます。

例年、NL 春号では前年度の会計報告案を掲載し、前年度収支の仮報告をすることが慣例となっています。それに従えば、今号で2019年度会計についての仮報告をすることになりますが、以下のような事情により、今号への掲載は見送り、後日改めてのご報告とさせていただきます。お願い申し上げます。

今回、執行部の期替わりに当たり、各年度収支の推移と学会の財政状態の確認をしていた中で、過去に生じた会計処理事案を発端とした影響が現在まで続いており、それ以降の各年度収支が正確に捉えられていなかったことが判明しました。不正や不適切支出といった事案ではありませんが、当年度の未払金を含んだ金額を次年度繰越金として決算した年度があり、それ以降玉突き的に同様の事態が続くこととなりました。そのために、実際よりも多い繰越金を会員の皆様にご報告していたこととなります。このことにつきまして、新旧会長より深くお詫び申し上げます。

現在、発端となった事案の発生年度まで遡って、各年度会計のし直しと確認作業等を行なっております。遠からず、2019年度までの正しい収支をご報告できる見込みです。2020年度予算案も、2019年度からの正確な繰越金を組み入れた上で作成することになりますが、上のような事情によって、各項目の見直し作業も必要になると考えております。

学会財政についても同様のことが言え、過去数年間にわたり、実際よりも多い繰越金の数字によって、財政的な余裕があるものと錯覚してきた面がありました。正しい数字で考えた場合、実はかなり厳しい財政状態にあるものと認識するに至っております。これにつきましても、後日改めてご報告させていただきます。存じます。

かような次第で、詳しいご報告と合わせて2020年度予算案をお示ししたく考えておりますので、それまでいましばらく時間を頂戴したくお願い申し上げます。

「新潮流」というタイトルからは少々逸脱するかもしれないが、自分がどのような「流れ」にのって語用論という大海原へと辿り着いたのかを簡単に振り返りながら、私の視点から今後の語用論について語ってみたい。

文学部英米文学専攻で英語学を学んでいた私は、統語構造と意味構造がきれいに対応していないミスマッチ表現に興味を持った。その中から、英語の Way 構文を卒業論文のテーマに選び、認知言語学のアプローチで研究することにしたわけだが、ちょうどその年に、『認知文法論』(山梨正明)と *Constructions* (Adele E. Goldberg) が出版された。1995年はその年だった。

修士課程では、意味と統語のミスマッチが起きているとされていた主要部内在型関係節 (HIR) 構文を研究テーマに選んだ。この構文は、「リングがテーブルに置いてあったのを食べた」というようなものであり、通常の連体修飾表現「テーブルに置いてあったリング(を食べた)」とは構造的に異なる。この特異な統語構造と意味構造をどう説明しようかと頭を悩ませていた時に、運良く小原京子先生の博士論文をご本人から頂く幸運に恵まれ、語用論へと導かれる大きな示唆を得た。背景的情報を解説的に述べるために新聞などで多用される連体修飾表現とは異なり、述定構造を持つ HIR 構文は新情報を提示し、*narrative advancing* 機能があると分析されていたのだ。これは、構文の選択において、語用論的要因が大きな役割を果たしていることを指摘したものであった。

特異な文法形式というものは、既存の形式では表現しきれない「何か」を表現するために存在するものである。その「何か」とは、談話を推し進めようとしたり、聞き手への配慮を示そうとしたり、発話者自身の責任を軽減しようとしたり、様々な語用論的要因が考えられる。認知言語学では意味論と語用論を截然と区別しないということになっており、自分もそれを頭では理解しているつもりだったが、真に理解できたのはこの瞬間だったのかもしれない。

語用論に興味をもった修士課程で、指導教員が加藤重広先生だったというのも大きな幸運であった。当時、加藤先生が「これからは語用論と

音韻論の時代が来る」という話をなさっていたのは、今でもよく覚えている。

修士を終え、博士課程へ進学した1998年の冬に、日本語用論学会第1回大会が開催されたのも、運命のようなものを感じる。博士課程に進んでからは、認知言語学と語用論、両方の視点から分析する機会がさらに増えた。これは、指導教員である山梨正明先生のおかげでもあるのは勿論だが、当時の研究室に集っていた諸先輩方が、容赦なく五月雨式にコメントのシャワーを浴びせてくださったことも大きい。

当時は、若者が好んで使用する表現の文法的動機付け（構文の拡張）について研究していたが、そこにも多くの語用論的動機があった。例えば、「全然大丈夫」のような表現は、肯定文で使用するのは誤用だとか、最近の若者は「全然」を肯定的な強調で使用するとか言われていたが、そうではなくて、文脈想定を否定する用法であると説明できる（尾谷 2007）。手料理を作ってくれた恋人との会話で考えてみよう。

- (1) A: 「ねえ、美味しい？」
B: 「全然美味しいよ。」

上記のように質問するからには、「自分が作った料理が、口に合わないかもしれない」という想定をAが抱いている（とBが想定している）ことがうかがえる。そこでBは、Aの想定を強く打ち消すために「全然」を使用するのである。そう言える根拠は、以下の会話例にある。

- (2) A: 【開口一番】「あっ、全然美味しい。」
B: 「え？ 不味いとも思ってたの？」

会話の冒頭でいきなり「全然美味しい」と言ってしまうと、まるでAが「Bの料理は不味いかもしれない」と想定していたように誤解されるだろう。これは、「全然」が単なる程度強調ではなく、文脈想定を否定するからである。

似たような例として、自分の想定を自分で否定している場合もある。以下の例は、某SNSで映画の感想を述べた書き込みであるが、この表現からは、この人がその映画にあまり大きな期待をしていなかったことがうかがえる。

- (3) 全然普通に良作でした。

この例は、「全然」が肯定的な程度強調ではない根拠ともなる。「普通」という語は中程度を表すため、「全然普通」を程度強調で解釈するのは矛盾することになってしまう。

「普通に」という表現も面白い。近年、形容詞と共起する「普通に美味しい」のような用法が見られ、奇異な表現だと糾弾されたり、「普通に」が程度強調の若者語だと言われたりしている。しかし、これも文脈想定を抜きには語れない表現である。井本(2011)では、このような用例が自然に響くためには「標準値よりも低い程度が前提として導入される」という文脈的条件が必要であるとして、以下のような例を挙げている。

- (4) 学食のラーメン、まずいって聞いていたけど、普通においしかった。

この場合は「まずいって聞いてたけど」という部分はその文脈条件に合致するが、「普通に」はその低かった期待値を「普通」へと更新する機能を果たしており、決して単なる程度強調になったわけではない。

以上のように、文法的におかしいとされてきた表現には、語用論的な動機付けを持つものが少なくない。私は、若者ことばに見られるような新奇表現や構文拡張などについて認知言語学的なアプローチで研究していたつもりであったが、そういった言語形式が生まれるのは常に言語使用の現場(usage event)であり、そこでは発話状況や文脈想定といった語用論的要因を無視するわけにはいかないため、必然的に語用論的なアプローチになってしまったようである。

使用されることのない言語を研究するならともかく、使用されることを前提とした言語を研究するのであれば、そこには少なからず語用論が関わるはずである。そう考えれば、知らないうちに“ゴヨーロン”に感染している「サイレント語用論」患者が無数にいると考えられる。今後は、そういった無自覚感染者に、いかに語用論の面白さに気づいてもらうかが鍵になるであろう。「全ての言語学は語用論へ通ず」とはやや言い過ぎかもしれないが、少なくとも、多くの言語学者を結びつけてくれる「のりしろ」もしくは「緩衝材」のような役割を果たすのは、語用論しかないような気がする。

参考文献

- 井本亮 2011. 「『普通にかわいい』考」『商学論集』79(4), 59-75. 福島大学経済学会
尾谷昌則 2007. 「構文の確立と語用論的強化: 「全然～ない」の例を中心に」『日本語用論学会第9回大会発表論文集』17-24.

*** 日本語用論学会第23回大会ご案内 ***

2020年度の第23回大会は、以下のとおり、創価大学（東京都八王子市）での開催となります。会員の皆様からの発表ご応募・ご参加をお待ちしております。なお、今後の社会状況によっては、オンラインでの大会開催の可能性もございます。未確定部分も含め、大会に関する情報は随時学会ホームページ上でお知らせして参りますので、ご確認ください。

- ◆日程：2020年11月28日（土）、29日（日）
- ◆会場：創価大学中央教育棟
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
- ◆参加費（事前登録、会員のみ）：
一般会員1,000円 学生会員無料
- ◆参加費（当日申込）：
一般会員・学生会員（院生）・非会員2,000円
（会員、非会員問わず）学部生は無料
- ◆懇親会費：一般会員・非会員5,000円
学生会員4,000円

◆大会テーマ

「おしゃべりな私たち：

Keep doing pragmatics!」

◆主なプログラム

時間帯などの詳細は追って発表しますが、大まかなプログラムは以下のとおりです。

《11月28日（土）》

- ☆口頭発表①
- ☆ワークショップ
- ☆ポスター発表
- ☆会員総会
- ☆会長就任講演 滝浦真人 会長
- ☆特別講演 井出祥子 先生
- ☆懇親会

《11月29日（日）》

- ☆口頭発表②
- ☆シンポジウム
テーマ：会話分析の基軸と展開（仮）
子ども（非定型発達児を含む）の相互行為
高木智世 先生（筑波大学）
相互行為における認識性
早野薫 先生（日本女子大学）
日本語教育におけるCA
岩田夏穂 先生（武蔵野大学）
相互行為における身体資源
城綾実 先生（早稲田大学）

◆発表募集

発表言語は日本語と英語のいずれかです。発表形態は、口頭発表、ポスター発表、ワークショップの3種類です。なお、ワークショップにつきましては、一つのテーマについて様々なアプローチから深く検討し、研究者の交流が図れる良い機会でもあり、今後も一層促進していく次第です。皆様是非奮って応募いただきますようお願いいたします。以下に公募日程と応募要領を示します。

◆公募日程

- 投稿締め切り：2020年8月10日(月)
- 採否通知：2020年10月上旬
- 大会発表要旨(Abtract)原稿締切：
2020年10月21日(水)
- 大会発表論文集(Proceedings)原稿締切：
2021年3月31日(水)

◆応募要領

①申し込み資格

口頭発表・ポスター発表の第一発表者、ワークショップの代表者として発表を申し込むには会員である必要があります。

②発表形態

- 1) 口頭発表：発表25分＋質疑応答10分
- 2) ポスター発表：1時間（掲示時間）
- 3) ワークショップ：1時間40分（司会者を含めて3名以上の団体）

③発表言語：日本語または英語

④申し込み先

発表を申し込むには学会ホームページの「マイページ」から投稿してください。投稿受付ページは6月中旬に稼働予定です。投稿の方法は後日学会ホームページ上で案内します。

⑤申し込み原稿の形式

発表の種類にかかわらず、申し込み原稿はすべて同じ形式です。

用紙サイズ：A4 縦

規定文字数：日本語2,500字以内、英語500 words以内。日本語の場合は文字数を、英語の場合はword数を、原稿の末尾に記入してください。

ファイル形式：Microsoft Word形式(doc、docx)、PDF形式(pdf)

- ・ 氏名と所属は記入しないでください。
- ・ 発表タイトルを1行目に、タイトルの後を1行空け、次の行から本文を記入してください。

- ・ワークショップの場合は、規定文字数に全員分の要旨が収まるようにまとめてください。
- ・文字数と word 数には、例文、表、キャプション、注釈を全て含みます。ただし、図形内のオブジェクトに添えられた文字や参考文献は含みません。日本語原稿の中にアルファベット等の半角文字を含む場合、半角文字 2 文字を 1 字と数えます。
- ・参考文献の書式は『語用論研究』に準じます。なお、規定から逸脱した形式やファイルフォーマットで応募した場合、不採用となることがあります。

⑥申し込み原稿の留意事項

申し込み原稿には、表現や構成のわかりやすさと説明の一貫性が求められます。かつ、以下のような点について過不足なく論じる必要があります。

- ・ 問題となる現象
- ・ その現象についての先行研究と問題点
- ・ 現象の分析に用いるデータ
- ・ 現象の分析方法
- ・ 現象の分析結果
- ・ 分析結果に基づく結論と理論的含意

⑦申し込み制限

一人の会員が発表者として申し込みができるのは、一大会につき 2 件までです(ワークショップを含む)。かつ、第一発表者、または、ワークショップの代表者として申し込みができるのは 1 件に限られます。

⑧二重投稿の禁止

口頭発表・ポスター発表・ワークショップへの発表申し込みにおいて、二重投稿を禁止します。大会運営委員会が二重投稿と認めた場合、その申し込みを受理しません。かつ、次年度の大会においても当該者を発表者に含む申し込みは受理しません。

※1. 二重投稿とは、他の学会で既に発表した、もしくは発表を申し込み中である内容、または、既に学術的刊行物に掲載された、もしくは投稿中である論文と極めて類似する内容で申し込みをすることを指します。

※2. 学士論文・修士論文・博士論文は、公表や出版がされていない場合、「学術的刊行物」には含みません。

※3. 学会の発表や学術的刊行物の掲載へ応募し、既に不採択が決定している内容を申し込む場合は、二重投稿に含まれません。

⑨選考結果の通知

選考結果は 10 月初旬に第一発表者宛に通知します。

⑩No Show に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会運営委員会に無断で発表を行わない場合やポスターの掲示のみで説明を行わない場合は、これらを「No Show」とみなし、学会ホームページにて公表します。ただし、事前、または、当日に(やむをえない場合には事後に)、発表を行えない(行えなかった)合理的な事情の説明がある場合には、「キャンセルされた発表」とします。

◆問い合わせ先

E-mail : presentation -at- pragmatics.gr.jp
(大会発表委員長・金丸宛)

投稿に関するお問い合わせは、7 月 31 日(金)までをお願いします。

◆第 23 回大会会場・創価大学への交通・宿泊について

[大会会場について]



会場：〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236
創価大学中央教育棟(Global Square)

[交通について]

★創価大学は、JR 八王子駅から北へ 4 km、バスで約 20 分のところにあります。八王子駅へは新宿駅から JR 中央線か京王線で約 40 分です。東海道新幹線の新横浜駅から JR 横浜線で約 45 分です。



〔宿泊について〕

JR 中央線の沿線のホテルがお奨めです。八王子駅前の主なホテルは以下の通りです。宿泊のご予約は各自にてお早めをお願いします。

- ①京王プラザホテル 八王子 Tel.042-656-3111
- ②the b (ザビー) 八王子 Tel.042-646-0111
- ③東横 INN 東京八王子駅北口 Tel.042-698-1045
- ④R&B ホテル 八王子 Tel.042-631-1515
- ⑤サンホテル 八王子 Tel.042-644-4141
- ⑥八王子スカイホテル Tel.042-623-1100

*** 地区研究会コーナー ***

◆中部地区研究会

中部地区研究会では、2019年12月4日(水)に名古屋大学大学院人文学研究科との共催で、森勇太先生(関西大学)の講演会を開催しました。ご講演のタイトルは「発話行為から見た授受表現の歴史」です。発話行為論を踏まえて、日本語の授受表現が現代のような様相になった歴史を論じる内容でした。ごく簡単にまとめますと、①上位者から下位者への絶対的な「くれる」だったものが、室町時代に視点制約(話者への求心的方向)が成立した、②行為指示表現(依頼～命令)から受益表現が成立し、現代では依頼や勧めが必須である、③申し出表現から与益表現が成立したが、現代では目上の人に「～してあげる」などとは言えない、などです。中世語から現代語までさまざまな例が俎上に載せられた、たいへん刺激的なご講演でした。(北野浩章)

*** 委員会より ***

★『語用論研究』編集委員会より

S/P21 はいかがでしたでしょうか。お届けが年度末のギリギリになってしまい大変申し訳ありませんでした。前編集委員長の滝浦先生を中心に関係の皆さまのご協力の下、かなりのページになりました。どの論考も、自由闊達な議論を進めています。ご批判、ご議論の一助になりましたら、編集委員一同幸甚に耐えません。

そこで、以下、ご報告とお願いを申し上げます。

今年度は、本学会の新体制となった年度です。編集委員会もメンバーが新しくなっております。詳細は、学会のサイトをご覧ください。編集委員長に、田中廣明が仰せつかり、副編集委員長に松井智子先生と森雄一先生をお願いしました。前編集委員長時代にもまして、充実した内容にと考えておりますので、よろしくご協力ください。

先般、会員メイリングリスト、学会サイトでもお伝えしましたように、次号『語用論研究(S/P)22』の、一般論文の投稿締め切りを1ヶ月延長しました。当初は4月28日としていましたが、新しい締め切りを

・2020年5月31日(日) 23:59 JST

としています。投稿は、学会サイトの会員専用ページからになりますので、ご注意の上、ふるってご投稿をお願いいたします。このコロナ禍の影響により、大学への立ち入りが制限されている方や、それに伴い様々な理由で、投稿者の皆さまが不利益を被らないようと言うことで、延長をいたしました。編集委員一同、査読その他、以前にも増して、投稿者の皆さまに寄り添った体制でと考えておりますので、よろしくお願いたします。

現在、このコロナ禍で、皆さまには大変な状況にあると拝察いたします。編集委員一同、一致協力して次号の編集に取りかかりますので、よろしくお願いたします。

(編集委員長・田中廣明)

★大会運営委員会プロシーディングス担当より

目下、大会運営委員会(プロシーディングス担当)では、2019年度第22回年次大会で発表された論文をとりまとめ、『大会発表論文集』(Proceedings)(第15号)(電子媒体のみの発行)を作成いたしております。ご提出いただきました原稿は、6月末頃に当学会ホームページ上に公開する予定です。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございます。

(竹田らら)

《事務局より》

★《新刊・近刊案内》★

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円です。学会財政の問題もあり、できれば7月末までにご納入いただきますよう、よろしくごお願い申し上げます。学会口座は以下のとおりです。

【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】

支店名：099

口座種類：当座

口座番号：130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会費専用ページ」より、クレジットカード決済も可能です。会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく、下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室

E-mail: psj@outreach.jp

★激甚災害被災会員の皆様の会費・大会参加費免除について

日本語用論学会では、平成 30 年北海道胆振東部地震、平成 30 年梅雨前線豪雨（平成 30 年 7 月豪雨含む）等の激甚災害、またはこれに準ずる災害で被災された会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2020 年度会費」ならびに「2020 年度年次大会の参加費」を免除しております。被災地の皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

免除申請先（メール、郵送のいずれも可。ご連絡いただきましたら、手続きの詳細をご連絡いたします。）

日本語用論学会事務局

〒448-8542

愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学 北野浩章研究室内

E-mail: secretary@pragmatics.gr.jp

■『はじめての語用論 基礎から応用まで』加藤重広・澤田淳（編）研究社（定価 2,500 円＋税）



本書は、言語研究を始めようとする読み手からすでに研究を続けている読み手まで、幅広い読者層に役立つ語用論の概説書である。第 1 章「語用論とは何か」で語用論の定義などを明確にし、またこれまでの発展も踏まえた現在の語用論の基礎

について解説するところから始まり、さらに細分化された理論が丁寧に説明された章が続く。今日までに研究が積み重ねられて発展してきた語用論がきれいに整理されていくような感覚を持てる点は、タイトルに「はじめての」と付されていても現役の研究者にも学ぶところは多いと考えられる。また、各章は「本章のポイント」が冒頭に設けられ、解説の後には「練習問題」と「文献案内」がついており、この本で学んだ後、さらに自律的に学習を進められるように方向づけられ、学びやすい工夫が施されている点は特に、初学者の助けとなるだろう。「まえがき」でも本書が「案内するガイド」になるよう作られたとあるように、まさに多様な読者が迷うことなく前へ進む手助けをする一冊である。

（2020.3.31 刊）

■『動的語用論の構築へ向けて 第一巻』田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）開拓社（定価 3,600 円＋税）



本書は、新たな語用論理論の構築の第一歩としてまとめられた論集である。言語が動的な性質を有していることに着目して「動的語用論」の構築を試みるものであるが、言語に限らず、この世界のいかなるものも変化していると考えれば、一つの原理を求めず、複雑系

の原理に挑む面白さを教えてくれる一冊とも言える。序章では、「言語のダイナミクス」の 4

分類(発話・言語獲得・歴史的・変異的)を提唱し、既存の理論・研究領域との対応を示したわかりやすい解説から始まっており、「動的語用論」の学術的な位置づけを明確に理解してから、それぞれの論文を読み進めることができる。第Ⅰ部で発話のダイナミクスに相当する「共通基盤化」についての4本と、第Ⅱ部で歴史的ダイナミクスに相当する「歴史語用論・文法化」についての3本に加え、第Ⅲ部で「理論と実証」として「動的語用論」へどのように理論的貢献ができるのかを示した4本の論文も収められている点は、「動的語用論」の汎用性を見出させ、読み手を魅了する。今後、第二巻、第三巻を出版予定で、理論構築を on going で味わうことを楽しみにできる、始まりの一冊である。(2019.11.27刊)

■『日本語配慮表現の原理と諸相』山岡政紀(編) くらしお出版 (定価 4,200 円+税)

本書は、日本語の配慮表現やその原理を整理し、全体像を示した概説と、その諸相を見せる論文が収められた一冊である。配慮表現の歴史や、定義、分類などを丁寧に整理した第Ⅰ部、各研究者がいくつかの配慮表現について実例と共に考察した論文7本が収められた第Ⅱ部、さらには、多言語(英語、中国語、アラビア語、ウズベク語)との対照研究の論文4本を収めた第Ⅲ部という、充実した構成である。読み手が、配慮表現を整理して理解する助けになるばかりでなく、国際化が進む今日に、異なる習慣を持つ人々の間での人間関係の構築に極めて重要な心がけとなる配慮を適切に表現するための大切な知見も与えてくれる。(2019.11.18刊)

■『場面と主体性・主観性』澤田治美・仁田義雄・山梨正明(編) ひつじ書房 (定価 15,000 円+税)

本書は、ひつじ研究叢<言語編>シリーズの第148巻で、31本の論文が収められた大規模な論文集である。ここでは、文という存在を、伝統的な文法研究のように言語使用に関わる様々な要素を考察の対象とせず、自律した客観的なものとみなすのではなく、主体としての話し手が叙述対象を切り取っているため、純粋に客観的なものではないとする言語観を出発点としている。タイトルでも示された「場面」や「主体性・



主観性」を主たるテーマとした論文を集めた、最初の2章の後、「モダリティと証拠性」、「命題・文に対する態度」、「言語行為と談話」の3章が続く。こうしたテーマの進み方は、学際的な論集を読み進める読み手としての理解を自然な形で深められる構成である。また、各論文が扱う言語は、現代日本語以外にも古典日本語、英語、スペイン語、ドイツ語、スウェーデン語、中国語、フランス語など多岐に渡り、従って個別言語学の枠組みをも学ぶことができる。1冊に多くが詰まった貴重な論文集である。(2019.4.26刊)

主観性」を主たるテーマとした論文を集めた、最初の2章の後、「モダリティと証拠性」、「命題・文に対する態度」、「言語行為と談話」の3章が続く。こうしたテーマの進み方は、学際的な論集を読み進める読み手としての理解を自然な形で深められる構成である。また、各論文が扱う言語は、現代日本語以外にも古典日本語、英語、スペイン語、ドイツ語、スウェーデン語、中国語、フランス語など多岐に渡り、従って個別言語学の枠組みをも学ぶことができる。1冊に多くが詰まった貴重な論文集である。(2019.4.26刊)

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■コロナ禍によるオンライン化でみなさま大変お忙しい日々を送っていらっしゃることに存じます。各種研究会・学会大会も次々に延期や中止となり、私たちは今もしかしたら今後の学会のあり様の転換点に立たされているのかも知れないとさえ思います。早く日常に戻り、この状態を学問の糧にできたらと願うばかりです。今は何よりもまず皆様の健康をお祈りします。(秦かおり)

■ニューズレター担当を拝命いたしました。どうぞよろしくお願い致します。新型コロナウイルス感染拡大により、皆、様々な局面で予定変更を余儀なくされています。本号も、これまでお伝えしてきたコーナーの一部はお休みの運びとなりました。会員の皆様もそれぞれに非常事態への対応に追われ、心身ともに休めない状況が続

いていることと拝察いたします。一日でも早く
事態が落ち着くことを祈るばかりです。(野村佑
子)

~~~~~

日本語用論学会 Newsletter 第 43 号  
発行：日本語用論学会広報委員会  
発行日：2020 年 5 月 30 日

[広報委員会]

- \* 委員長：秦かおり
  - \* Newsletter 編集担当：野村佑子
  - \* 公式ホームページ担当：横森大輔
  - \* 会員メーリングリスト担当：八木橋宏勇
- E-mail: [webmaster@pragmatics.gr.jp](mailto:webmaster@pragmatics.gr.jp)